

書評『誰が日本の医療を殺すのか』本田宏・著(洋泉社)

～現場から医療崩壊の現実を告発する著者渾身の書～

地域医療懇談会代表 洞ノ口佳充(庄和中央病院副院長・外科)

本田先生は、かねてより日本の医療がかかえる諸問題、「医療崩壊」という問題の根源には医師不足という問題があることを主張してきた。各種の論評、対談、講演等においても、その論旨を主張してきている。それらを一つに集約したものがこの著書といえるだろう。

本のタイトルに示される「誰が」とは、政府・厚労省を指している。政府・厚労省こそが国民を欺き、医療崩壊というべき事態を招き、さらに深刻化させようとしているのだ、ということをも本田先生は明確にしようとしている。そのために「日本の医療の現場の現状をできるだけデータに基づいて解説し、その結果、日本国民が正しい判断ができるように、との願いで書いている」(P.8)という。つまり、国民は正しい情報が与えられず、正しい判断ができない状況に置かれているというわけだ。

たとえば、本田先生は、医師不足でなく医師の偏在を主張する厚労省に対して、「グローバルスタンダードとしての OECD」のデータ比較で日本の医師数の少なさを浮き彫りにするとともに、「GDP 当たり医療費が G7 加盟国で最低なのに国民窓口負担は世界最高」であることを示して「低医療費政策」を問題にしている。

本田先生は、自身が勤務医であり医療現場で激務を担っているということをもバネに、勤務医の働き方の改善及び医師不足の解消を訴えている。今日生み出されている「医療崩壊」という事態の根底には、医師不足とりわけ勤務医の不足があることをあげている。勤務医の「増大する仕事量にみあう医師数が現場に補充されず一人の医師にかかる負担が増大し勤務医を疲弊させ」、そして「働き盛りの勤務医が第一線から去って」しまったというわけだ。そのため、全国各地の病院で診療科の廃止、休診が相次ぎ、人手不足のために医療の安全が脅かされているなど深刻な状況が次々と生み出されている今、医療人、必読の書である。

ひとつ、私が付け加えるとすると"医師不足の構造"とでもいうことだろうか。たとえば、麻酔科医師不足、外科医師不足についていうと、こうである。国立大学病院手術部会の調査を見て欲しい。05 年度の手術件数は 20 万 8264 件で、1996 年の 14 万 6557 件の実に 1.4 倍になっているという。一施設当たりでは、年間 1500 件増えている計算になるが、それを支えるマンパワーは、医師もパラメディカルもさほど増えていない。現状は多忙を極め、医師不足がいわゆるゆえんである。

このほぼ同じマンパワーでの急激な手術件数の増加は、何故にもたらされているのか、ということである。以前と比べ小病院が手術をしなくなっており、その分、大病院での手術件数が増加していることもあろうがそれにとどまらない。

グラフを見ると、03 年、04 年と件数が更に急カーブを描いて上昇している。川淵孝一氏は、『論座』(2007 年 3 月号)で政府・厚労省の大学病院に対する最近の医療政策の大転換を述べている。「三つの危機に直面する大学病院」の中で、「小泉内閣の下で、一貫して進め

られた診療報酬の切り下げ、とりわけ、03年に導入されたDPCによって更に04年の独立行政法人化によって経営管理が厳しく求められるようになった」と述べている。

その状況の下で、大学病院手術部幹事堀田氏は、「医業収入を増やすには、手術を増やすのが一番ということになる」と述べている。医業収入増に向けて、出来高で請求できる手術件数を増やして対応するのが一般的となっているわけである。

こうしてみると、麻酔科医師、外科医師不足という事態は、政府・厚労省の医療政策があり、その下で経営危機をのりきるため、病院当局が手術件数を極限まで、人員はそのまま増加させ、現場の医師達が「馬車馬のように働かざるをえない」という、3者の関係が、構造的に捉えられると思う。

その他、深めたい点はあるが、我々がまずこの本から汲み取るべきものは、「闘う医療界のスポークスマン」としての、彼の情熱であると思う。「これまで...医師がほとんど(何も)建設的な動きをしてこなかったことが、今の医療崩壊を招いた一つの原因だと思う。その反省を込めて、私は忙しくても日々、情報を発信しつづけているのだ」(P211)このままでは「日本の医療崩壊は決定的だ。どうか、読者の皆さんも私と一緒に...抗議の声をあげていただきたい。今立ち上がらなくては間に合わないのである。」「この活動にかけて死ぬなら本望だ」(P212)と彼は訴えている。

私は、彼の講演を機に「地域医療懇談会」を立ち上げて活動している。これからも自分なりのやり方で、応えていきたいと思っている。

(平成19年10月17日)